



from PARIS

フランスにおける 文化政策の一側面



ケ・ブランリー美術館

当パリ事務所からアルマ橋を渡ってセーヌの左岸に行くと、ケ・ブランリー美術館があります。この美術館、昨年6月に完成したもので、アジア、アフリカ、オセアニア、南米等の原始美術に焦点を当てたユニークなものです。これらの地域の文化に関心のあるシラク大統領の肝いりでつくられたものと言われます。

大統領の肝いりでつくられた美術館と言えば、ミッテラン大統領のルーブル・ピラミッド、ジスカール・デスタン大統領のオルセー、ポンピドゥー大統領のポンピドゥーセンター（現代アート）があります。ドゴール大統領に始まる第五共和制下のフランスでは、大統領自らが大規模な文化事業を発案することが伝統となっています。当然、そうした事業の予算は、議会の承認を得なければなりません。これまで、特段の反対にも遭わず実

現されているとのこと。数億～10億ユーロもの予算規模で、発案から完成まで10年を要する大掛かりな事業です。今年の5月には、サルコジ氏が大統領に就任しました。文化省の重要性拡大や文化遺産保護を公約で主張した彼が何をつくるのか、注目されるどころです。

これらの有名美術館ですが、現在、地方や海外への進出を積極的に進めています。フランス国内に限っても、ルーブルが北部のランスに、ポンピドゥーセンターが東部のメッスに分館設立を計画中で、2008年には一部がお目見えします。これらの都市は、リーディング産業が衰退する中、多額の建設費を自ら負担しながら文化活動による町おこしを図る計画です。面白いことに、いずれの分館も、日本人の建築家がデザインを担当しており、伝統的な街並みとユニークな美術館の融合が企図されています。

ところで、2008年といえば、日本とフランスが外交関係を結んでから150周年を迎えます。これを機に、さまざまな記念イベントが行われる見通しで、パリにある美術館でも日本関係の特別展がありそうです。

来年あたりフランスに来られると、何か新たな発見があるかもしれません。（日本銀行パリ事務所）



メッス市の街並み



ポンピドゥーセンター分館の工事現場